

ボーイスカウト福島連盟 桑折第1団

ボーイスカウト隊 渡邊 希重 (桑折町立醸芳中学校3年)

「ボーイスカウト運動」とは何か知っているだろうか？ ボーイスカウトとはベーデン＝パウエル卿が1908年に始めた運動のことだ。ボーイスカウトには三つの誓いと八つの掟がある。スカウトはそれらを守るように努める。私は小学校一年生からボーイスカウトに所属している。

そして今年石川県で行われた日本スカウトジャンボリーに参加した。約七日間一万三千人のスカウト達と生活を共にした。そこでは多くの海外のスカウトとの交流があった。私の隊にはスコットランドから二人のスカウトが来た。二人とも十八歳とは思えないほど体が大きく、緊張していたからか表情は硬かった。また日本語が全くわからなかったためコミュニケーションが取れなかった。恥ずかしいことだが私は二人の事を怖いと思ってしまった。人を第一印象だけで決めつけてしまうのはいけないことだとわかってはいた。しかし、私は二人とあまり仲良くなれそうにない、と勝手に決めつけていた。そんな時一人で炊事をしていた私を二人は無言で手伝ってくれた。驚きながら **thank you** と言うと彼らはいっこり笑って返事をしてくれた。その時今まで彼らに対して抱いていた自分の勝手なイメージが崩れさった。同時にそんなことを思っていた自分が本当に恥ずかしくなった。そして無意識のうちに偏見を持っていたことと差別的な思想をしていたことに気づいてショックを受けた。私は東日本大震災以降偏見を持つ人達による風評被害に苦しむ人達を知っている。それなのに福島県に醜い言葉を投げかけたような人達と同じようなことをしてしまったのだ。彼らは私がそんなことを思っていたなんて知らなかっただろう、しかし本当に心から彼らに謝りたい。

日本のボーイスカウトに弥栄という祝声がある。弥栄とは昔の言葉でますます栄えるという意味だ。弥栄。この二文字にどれだけの思いが込められているだろう。仲間を祝福する時、感謝する時、別れの時。多くの場面でこの言葉は使われる。相手を尊重し敬意を持って接する、そんなスカウト精神がこの弥栄にあると私は考えている。この精神を忘れて私は彼らに醜いことをしてしまった。そんな私だから思うことがある。差別や偏見は他人をよく理解していないからしてしまうのだと。私は彼らのことを上っ面だけで判断して二人のことを知ろうともしなかった。それと同じだ。深く他人について知るの難しい。それができないのなら他人には常に敬意を持って接することが差別や偏見をなくす上で大事なことだと思う。

ボーイスカウトをしていて忘れられない話がある。「アンノウソルジャー・無名のスカウト戦士」の話だ。太平洋戦争の末期、南洋のある島に出征したアメリカ兵が、日本軍と戦闘を交えたさい負傷して気を失い倒れてしまった。そして銃剣を手に突撃してくる日本兵の姿が目映った。その時彼は死を覚悟した。彼は幼い頃からボーイスカウトに入っていたので無意識のうちにボーイスカウトの敬礼、三指礼をしていた。しばらくして起きあ

がってあたりを見回すと木の小枝にぶら下がっている小さな紙片があった。

「自分もかつてはボーイスカウトだった。ボーイスカウトは世界の人すべてが兄弟だ。3つの誓いをあらかず三本指を見てスカウトとしての気持ちがよみがえり、兄弟であり傷ついているきみを殺すことができなかった。手当をしておいた。1日も早く回復してほしい Good luck!!」

スカウトは友情に厚い。スカウトの掟の二番目にある言葉だ。戦争のなかにあってもスカウトの掟を守った勇気ある日本軍の兵士の行動に感動した。そしてスカウトは世界の人全てが兄弟。この言葉が私の心に強く響いた。国や人種が違えば全く違う人。そんな風に思っていた私は言葉が出なかった。信じるものが、育った国が異なっていようとこの世界に生きている全ての人には兄弟。そんな兄弟が傷ついていたら手当をする。確かに当たり前のことなのだ。しかし全く同じ状況で彼と同じことができるのか。私にはおそらくできない。もしここでトドメをささなかつたら後で殺されるかもしれない。敵を助けたのがバレたら仲間に殺されてしまう。私ならきっとそう考えて傷ついている彼を助けることはしないだろう。

彼のような行動を世界中の全ての人ができるべきだと戦争などなくなるに違いない。しかし私達はとても臆病なのだ。そしてとても貪欲だ。己のことを一番に考えて自分の利益ばかりを追求する。誰かのために命を賭けるなんてとても出来ない。しかし私達はそんな自己中心的な考えをやめなければならない。そういった考えが誰のためにもならない無益な戦争を引き起こすのだ。誰かが傷つき悲しむのを見て見ぬ振りをするのはもう終わりにしなければならない。その行動のせいで差別や偏見がいつまでたってもなくなるのだ。誰かが行動してくれるのを待つのはもう終わりにしなければならない。間違いや過ちを犯してしまうのは私達だ。それを正しい方へ導くのも私達なのだから。より良い世界を作るために私達は自ら行動しなければならない。

来年私は世界スカウトジャンボリーに参加する。今年の日での大会より多くの国のスカウトと交流することになる。私は三年間英語弁論大会に出場していて英語には自信があった。しかし私には言葉の壁よりも前に心の壁、無意識の差別意識があった。心の壁ができてしまったのは私の思い込みと意思疎通を上手く図れなかったからだ。知ろうとする、伝えていく、この二つを心掛け心の壁、差別偏見をまずは自分からなくしていきたい。

己のためではない。他人のためを思う優しい世界。国や人種が違って分り合える、差別や偏見がない世界。そんな世界を目指して。弥栄。

この論文は平成三十年十一月二十八日、福島県教育委員会の中学・高校生の国際理解に関する優秀な論文を対象にした「朝河貫一賞」の優秀賞を受賞しました。